

～輝きの子育て～

愛情の証明は

小さなことを忘れないでいる 記憶力の誠意だ

愛情とは何だろうと考える。作詞家であるから、たっぴりと愛の歌をかいているが、そこで歌われる愛とは少し違っている。哲学的なことを言うつもりはないが、愛情とは実に日常的なことで、人間が人間を理解するための唯一の心持ちだと思う。もちろん真反対の憎悪による理解もあるだろうが、それよりはやはり愛情を語ろう。

「愛情」という言葉は現在では、空虚な風船のような存在になっている。よく目につくところにあるが、重量感がなく、過剰に期待したり、そんざいに扱ったりすると簡単に割れる。

それでも、何やら、人間が幸福に過ごすための象徴として、割れても割れても新たな風船として空に浮かぶ。だが、人々は、幸福になるために役に立てるすべを持たない。悲劇のあとで、「ちょっとだけ愛情があったらなあ」と、悔いるだけのことである。悲劇の原因は愛情の欠如ということは知るのだが、その愛情のありようがわからない。

家族はかつて、間違いなく愛情に包まれていた。夫婦の間に愛情があり、子どもが生まれて家族になり、無条件の信頼のもとで、その関係は愛情で繋がれていた。

ほんの少し前まで、なぜ、空気があるかというくらい当たり前のこととして、人と人の間に愛情があったのである。その存在を検証することさえなかった。

それがなくなった。言葉は抽象になり、死語になった。親が子を殺し、子が親を刺し、また、子は友と思われる子を殺すようになった。愛情がないからとしか思えない。風船のように存在する愛情が、全く役に立たないからである。もしくは、愛情は突然の切り札にならないということでもある。

愛情を難しく考えると、ますます解けなくなる。だが、愛情の示し方とか信じ方だと、わかるかもしれない。

ぼくは、愛情とは、他人（家族も含む）の言葉をきちんと聞く誠意と、それを忘れないでいる記憶力だと思っている。

何気ない、さりげない日常の会話の中にちりばめられていた語り手の本心を、よく覚えていてあげて、ある日ある時、それに応えてやることである。

それは、好きなもの、欲しいもの、なりたいものという欲求もあれば、嫌いなもの、避けたいもの、二度と言われたくないものといった拒絶のものもある。

欲しいものや嬉しいことを知っていてくれただけでも愛情を感じるし、嫌悪を自然な態度で避けてくれたら、それも強く感じる。

会話はこの前提で成立するのである。言うだけで、聞くと覚えるがないと、愛情には育たないし、記憶力の誠意のない会話は、不信の増幅しかならないのだ。



清らかな厭世 ～言葉を失くした日本人へ～
阿久 悠著（新潮社）より